

# 栃木県栃木市中根八幡遺跡

## 第3次発掘調査概要報告

ARCHAEOLOGICAL EXCAVATION OF THE NAKANEHACHIMAN SITE

ring-shaped earthen mound Jomon site,

Tochigi city; the third season short report.



中根八幡遺跡学術発掘調査団

Nakanehachiman Research Project

奈良大学・國學院大學栃木短期大学

Nara University and Kokugakuin Tochigi Junior College

〔『文化財学報』第36集、73—86頁、2018年3月31日発行・収載〕

# 栃木県栃木市中根八幡遺跡第3次発掘調査概要報告

## 中根八幡遺跡学術発掘調査団

### 1. 2017年度調査の概要

中根八幡遺跡は、栃木市南部（旧藤岡町中根）の渡良瀬遊水地（旧赤間沼）に面した台地縁辺部に立地する縄文時代後晩期に造営された環状盛土遺構である（第1図-a）。昨年度までに2次にわたり調査報告を行った（中根八幡遺跡学術発掘調査団2016・2017）。今年度もこれまでと同様に、奈良大学と國學院大學栃木短期大学の教員・学生を中心とする調査団を結成し、栃木市教育委員会の後援と、地元中根地区の協力のもと、学術発掘調査を実施することとした。

今年度の調査では、まず第1に昨年度に実施したA区の掘り下げを引き続き実施した（第1図-b・c）。トレンチを南側に拡張して掘り進め、漏斗状耳飾・手燭形土器など多数の遺物が出土した。また、A区から約40m離れた東側の民家の裏側に位置するB区について、今年度は壁面に沿ったトレンチを掘り下げ、盛土の下部にあたるローム層上面まで調査することとした。

このB区から南に位置する栗林と水田の境付近にトレンチを設定し、C区とした（第1図-b）。C区を設定した地点は、環状盛土遺構の中央窪地のやや南側に位置する。これまでの調査では環状盛土遺構の盛土部分において発掘調査を行ってきたが、中央窪地での最初の確認調査となる。本地区での確認調査は、どの程度窪地が人工的に削られているのかを検討することが目的である。昨年度に引き続き國學院大學栃木短期大学では遺跡を活用したパブリック・アーケオロジーの取り組みを実施したほか、現場最終日に実施した現地説明会では多数の方々にご来場いただいた。実施にあたって、サポートをいただいた方々に改めて謝意を表したい。

なお、今回の調査では、土壌中のテフラ分析を火山灰考古学研究所の早田勉氏に実施していただいた。その成果を簡単ではあるが最後に掲載することにする。本概報で示すことができなかった詳細については、いずれ正式報告において報告することにした。（小林）

### 2. 調査日誌

#### (1) 発掘調査

8月26日（土）晴 國學院大學栃木短期大学より機材搬入。

8月28日（月）晴 本日より本格調査を開始した。國學院大學栃木短期大学日本史フィールド・子ども教育フィールドの学生・教員23名が現地に入った。まずA区周辺の草刈り、A区の掘り起し、原点移動を行った後、A区を南に50cm拡張し、A1～A5グリッドで10cmずつ掘り下げた。午後に奈良大学の先発隊が合流した。

8月29日(火)晴 午前中は引き続きA区を掘り下げたが、この最中にはほぼ完形の耳飾が出土した。午後は、とちぎ子どもの未来創造大学登録講座「縄文遺跡を発掘しよう！」を開催し、栃木県内の小・中学生15人を対象に、学生が指導しながら発掘・土器洗い・拓本・創作音楽活動のワークショップを行った。拓本は色画用紙を台紙としてラミネート加工し、しおりとして仕上げた。また、創作音楽活動は、音楽教育を専門とする早川富美子教授の指導のもと、前回同様、土器文様をイメージして、縄文時代にあり得た素材を楽器化した。今回は、模造紙の楽譜ではなく、時計のイラストを用意して1分間の中で合奏を行うこととした。また、奈良大学後発隊が合流し、中央窪地部分の栗畑に新しく調査区(C区)を設定した。

8月30日(水)晴→曇 A区はA1～A5グリッドの掘り下げを引き続き行った。B区では掘削土から遺物を回収するためふるいがけを開始した。C区は前日に引き続き掘り下げを行った。測量班は昨年度同様、平板を用いてA区南側で地形測量を開始した。夕方からは差し入れのイノシシ・シカなどの肉でバーベキューを行い懇親を深めた。

8月31日(木)晴→曇 A区は壁面を精査し層位を確認した後、北壁側に南北30cmのサブトレンチを設定し、サブトレンチを10cmずつ掘り下げた。B区は壁を精査し分層を行なった。C区は掘り下げを行った。測量班は作業継続。

9月1日(金)晴 A区ではサブトレンチの掘り下げを行い、A1グリッドは1.8～1.9mまで掘り下げ、ローム層が出現した。B区では土層断面図の作成を開始した。C区は引き続き掘り下げを行い、縄文以降～古代に相当する畦を確認した。また、鹿沼層上層と考えられる黄色砂を確認した。11時よりコミュニティFMであるFMくらら857の「とち介PのHAPPY TOWN」(栃木市提供番組)に、中村と栃木市教育委員会の高見哲士氏が出演し、調査内容や現地説明会について紹介した。現場の学生たちも番組宛のメールという形で参加した。

9月2日(土)雨→晴 午前中は雨のため、栃木市藤岡歴史民俗資料館で、これまでに採集されていた中根八幡遺跡の資料や、前期の篠山貝塚、中期～晩期の藤岡神社遺跡の資料などを見学した。また、神社北側で表面採集を行った。雨が上がり作業を再開。A区で小形の土偶が出土した。B区は前日に引き続き土層図を作成した。またピットを3基確認した。C区では清掃を行い、写真撮影と図面作業を開始した。

9月3日(日)晴 午前中より、地元の方々、研究者が見学に訪れた。A区は午前中にA6、A7グリッドを開け北壁の清掃を行い、写真撮影と図面を作成した。B区はピットを完掘し、写真撮影と図面を作成した。午後に開催した現地説明会には50名以上が参加した。その後、A区・C区で土壌サンプルの採取。各調査区で断面図・平面図の作成。測量班は作業継続し図面を完成させる。調査終了後、調査区を埋め戻し、機材を短大に撤収した。

9月4日(月)晴 午前中に奈良大学へ搬出する遺物の選別と宿舍の清掃・片付けを行い解散した。

## (2) 整理作業

整理作業は、國學院大學栃木短期大学はA1～A3グリッドの出土品、奈良大学はA4～A6グリッド・B区・C区の出土品を担当し作業を進めた。國學院大學栃木短期大学では、後期授業開始とともに毎週火曜日の考古学演習、考古学フィールドワーク、放課後を利用して整理作業を開始した。奈良大学は9月19日より毎週月、火、水曜日の放課後に整理作業を行った。

(高垣・新里・中島・荒木)

### 3. A区における調査の概要

#### (1) 調査概要

本年度は作業空間と視界の確保のため、昨年度までの掘削範囲の南側50cm分をA1b～A6bグリッドとして50cmほど掘り下げた（第2図-a）。次いで、昨年度A1グリッドで確認していたローム層上面を約30cm掘り下げるとともに、A2・A3グリッドについても同レベルまで掘り下げた。

A1グリッド東壁で火山灰分析用の土壌サンプルを採取したほか、壁面を50cm×10cmの単位に区切って土壌硬度を計測した。土層堆積状況については、これらの結果をもとに総合的に判断して最終的な結論を出したいが、現状の認識は以下のとおりである。A1～A3グリッドでは最下層に黄褐色のローム層（6層）、その上に暗褐色土層（5層）が堆積する。この間にいわゆる漸移層と考えたにぶい黄褐色土層（8層）が部分的に確認された。盛土やその他の遺構による可能性もあり、調査範囲を広げて判断したい。さらにA1グリッドからA6グリッドにわたって黒褐色土層が堆積する（4層）。ここには多量の土器片のほか、微細な骨片なども確認できる。この上に、にぶい黄褐色土層（3層）が広がる。色調は一定ではなく、砂粒の含有もグリッドによって異なることから当初からローム再堆積層と考えていたが、後述の火山灰分析でも裏付けられた。これより上部は黒褐色土層（2層）が堆積しており、昨年度は細かく分層したが、今回は筐根の攪乱や現代ゴミを含む表土（1層）と区別するにとどめた。

#### (2) 出土遺物の概要

第3図と第4図には各グリッド・人工層位ごとに、時期幅を考慮して主要なものを掲載し、第4図には主な土製品を掲載した。遺物は10cmの人工層位で掘り下げた（標高22.2mを基準に、例えば120cm～130cm下の箇所から出土したものを-120Lと表記する）。

土器は、阿玉台式～安行2式が認められ、全体として加曾利B2式期～後期安行式期の土器が多いこと、特定の層位と型式が対応せず、上層から下層まで、阿玉台式～加曾利B2式が混在して出土することはこれまでの知見通りである。特徴的な土器として堀之内1式期の切断蓋（第4図-14）があり、薄い器面に黒と赤で彩色されている。また、第4図-25は関西の檀原式文様に由来する後期末葉～晩期初頭の浅鉢、第4図-34はおそらく加曾利B2式～曾谷式の小形の脚台付土器の脚部である。

第4図-36～41・45は土製耳飾である。36はほぼ完形の耳栓型。沈線等は施されないが両面とも中央部分に粘土を貼り付けて膨らみをもたせている。38・39・45は無文の薄手の耳飾破片である。40と41は、透かしをもち、細かい刻みを施した精製品の耳飾である。両者ともに、外面に赤彩を施している。第4図-44は手燭形土器である。全体ににぶい黄褐色、無文で丁寧にナデ調整が施されている。内面に顕著な痕跡は認められない。第4図-42は薄く平たい破片で、土版の可能性がある。全体ににぶい黄褐色、無文で丁寧にナデ調整が施されている。

（小林・中村）

### 4. B区における調査の概要

B区は排水用に掘削された部分の西側壁面調査と、壁面に沿ったサブトレンチの調査を昨年度から継続している。昨年度に大形の底部破片の出土位置を土柱状に残して調査を終えたため、この部分を外して壁面を

精査した。千葉県三輪野山貝塚の調査経験を持つ流山市教育委員会の小川勝和氏の参加を得て、前年度、黒褐色度A・褐色土として詳細な分層を保留していた部分について、改めて分層を行った（第2図-b）。7～9層は盛土層と考えられる。9層以下は、前年度に落ち込みの存在を確認していたが、境界は不明瞭である。10～17層、焼土の少ない18層～24層、ローム質の25層～29層はそれぞれ類似しており、まずこの水平ラインを分層した。次いで、ローム質土のうち、27層・29層はローム層と考えられるもので、28層と区別しえる。ここから立ち上がるものとして18 / 19層、10 / 11層を区分した。20層と23層もローム質の強さで比較的明瞭に区分し得た。こうして確認した落ち込みは上端1.5m幅、下端85cmとなる。この覆土は焼土をほとんど含まない21層、焼土の多い13層、やや多い12層を区分した。また、南端で柱穴覆土を検出している。

また、黒褐色土下部から幅50cmで設定したサブトレンチも昨年度同様ローム層上面まで全体を掘り下げ精査した結果、北側に2個所の落ち込みを確認した。半截して調査した結果、遺存していたのは深さ10cm程度であった。壁面南端で確認した柱穴は平面でも検出されている。

掘り込みの南側上部から加曾利B3式の大形破片が複数出土し、接合の結果、上半部の約1/4周分を復元しえた（第5図-2）。また、ほぼ同レベルで加曾利B1式の粗製土器も出土している（第5図-1）。

（中村・中島）

## 5. C区における調査の概要

### (1) 調査概要

遺跡東側に広がる畑地では、中央が最も低くなっており、西側に中世の如来像が安置された観音堂が所在する。この位置は、中世から近世にかけて青蓮寺という寺院があったとされ、現在敷地内には水田と栗林が広がっている。遺跡の窪地部分とされるこの位置をC区とし、トレンチを東西方向に2m×2mで設定した（第2図-c）。東向に、北東を1ブロック、南東を2ブロック、北西を3ブロック、南西を4ブロックとし、ブロックごとに掘り下げを行った。

表土下に中世の遺物が確認されたが、遺構は見られなかった。1・3ブロックにおいて、縄文以降～古代の畦と見られる遺構が確認されたが、根の攪乱の可能性も考えられる。それより下のローム層上面では縄文の遺構と見られるものは確認されず、ローム層内でも遺構は見られなかった。

C区表土～2層（厚さ約20cm、小礫混じりのしまりが弱い黒褐色の砂質土）は土器を若干含む層で、栗林栽培のための層とみられる。3層（厚さ約10cm、しまり弱い）は炭化物混じりの黒暗褐色土層で、付近に中世から江戸にかけて寺院があったことや、かわらけや陶器などの遺物が出土していることから中世の層であると考えられる。1・3ブロックでは表土下6・7・8層に黒色土（厚さ約15～20cm、しまりは上層部より強い）がみられ、縄文以降～古代の田畑に伴う畦であった可能性がある。3ブロックの北壁から50cmのサブトレンチでは、最終的に表土下-185cmまで掘り下げた。10層（-165cmあたり）から砂っぽい黄褐色の層（厚さ約50cm）がみられ、鹿沼層の上層かとみられたが、その下の11層（しまりが強い、にぶい黄褐色まじり黒褐色土）は硬質でソフトロームの可能性は低い。また、ソフトロームの上にある粘土層が見られないため削られた可能性も考えられる。いずれにしても、A区の盛土下とは違う層が確認された。

また、北壁にて西端から約40～50cmの位置で土のサンプリングを行った。サンプリングをした層は、2～6層、9～13層で、計11個のサンプルを採取した。以下でも述べるように、テフラ分析では、C区において、火山灰が人為的に除去された後にAs-B（浅間Bテフラ）降灰頃から土壌の形成が始まったと推測されたが、

調査で認識された変遷過程は、テフラ分析ともほぼ一致しているであろう。

## (2) 出土遺物の概要

C区出土の土器は、全体の総量は少なく、縄文時代後期前半と後期中葉の土器を有する特徴がある（第6図）。そして、晩期の土器は少なく、これに古代から中近世の土器・陶磁器・瓦を含む。中近世の遺物は、サブトレンチの上層付近からも出土している。総じて土器の破片は小片が多い。まず、1から4は堀之内式土器で、1・2は縄文地に沈線を施す堀之内1式で、3・4は櫛菌状の沈線をもつものである。5から8は後期中葉の土器群である。5・6は後期中葉の粗製土器で、6は胴部に格子目文をもつ。7・8は安行1式土器で、7は粗製土器の胴部片であり、8は精製深鉢形土器の口縁部片である。

10・11は中近世の陶器と土器で、10は摺鉢の口縁部片であり、口縁端部は平坦面を有する。11は、土師質土器の皿である。

（小林・岩永）

## 6. 栃木市中根八幡遺跡におけるテフラ分析

### (1) はじめに

栃木県域南部には、日光火山群、赤城、榛名、浅間など北関東地方とその近辺のほか、遠方の多くの火山から噴出したテフラが多く降灰している。とくに後期更新世後半以降に降灰したそれらの多くについては、噴出年代や特徴がテフラ・カタログに収録されており、考古遺跡でテフラを検出することで、遺物包含層や遺構の層位や年代などを求めることができる。栃木市中根八幡遺跡の発掘調査でも、環状盛土遺構を構成する可能性が高い土層が検出されたことから、テフラ分析を行って、特徴的な土層の起源や堆積の状況などを明らかにすることになった。

### (2) テフラ分析（テフラ検出分析・テフラ組成分析・屈折率測定）の概要

発掘調査担当者により採取された試料のうち、A区東側の5試料とC区北壁の11試料の合計16試料（第2図-a・c）を対象に、テフラ粒子の量や特徴を定性的に求めるテフラ検出分析と、限られた粒径区画における火山ガラス比と重鉱物組成を明らかにするテフラ組成分析を行い、さらに火山ガラスの屈折率測定も実施した。

テフラ検出分析では、C区北壁の試料7（9層）以上でスポンジ状軽石型の火山ガラスが比較的多く認められた（第7図-1）。その多くは、浅間Bテフラ（As-B, 1108年）に由来する淡灰色、淡褐色、褐色の火山ガラスで、ほかに榛名ニッ岳渋川テフラ（Hr-FA, 6世紀初頭）に由来する可能性が高い白色の火山ガラスも含まれている。これらは、試料6（6層）から試料5（5層）にかけて比較的多い。試料2や試料1（以上、2層）には、このほか、浅間A軽石（As-A, 1783年）に由来すると考えられるスポンジ状や繊維束状に発泡した灰色をおびた白色の軽石型ガラスが認められる。

次に、とくに起源が注目されるA区東側の3層を含む5試料と、C区北壁の最下位の2試料の合計7試料についてテフラ組成分析を行った。その結果、A区東側のいずれの試料からも火山ガラスが検出された（第7図-2・4）。また、多くの土層から斜方輝石や単斜輝石などの重鉱物を検出した（同図3）。このうち、試料3（3層）に含まれる火山ガラス（32粒子）の屈折率（n）は1.497-1.503である。

### (3) まとめにかえて

A区東側の3層(試料3)に含まれるテフラ粒子のうち、中間型やスポンジ状軽石型、また繊維束状軽石型火山ガラスの一部は、その特徴から屈折率(n)が1.500-1.503に対応すると思われ、浅間大窪沢第1軽石(As-Ok1, 約2万年前)や浅間板鼻黄色軽石(As-YP, 約1.5~1.65万年前)に由来する可能性が高い。また、この試料に少量含まれる低屈折率の火山ガラス(n:1.497)は、浅間萩生テフラ(As-Hg, 約2~2.4万年前)に由来する可能性がある。さらに、無色透明のバブル型ガラスは屈折率(n)が1.499-1.500に対応すると思われ、始良Tn火山灰(AT, 約2.8~3万年前)と考えられる。したがって、3層(試料3)はローム層の再堆積層とする考えと矛盾せず、その本来の層位はローム層最上部付近の可能性が高い。

同じ明色の土層でも、A区東側最下位の6層(試料9)は明色の砂質土で、C区北壁の試料10(12層)~試料8(10層)に比較的似ている。また、C区北壁の試料11(13層)は黄褐色砂層である。これらの堆積物に関しては、地形を構成している河川性堆積物とそのすぐ上位の砂質土(いわゆるフラッド・ローム層)と考えられる。

以上のことから、流水による浸食や地すべりなどが無ければ、人為により火山灰土が除去された後に、A区ではローム層などで盛土が行われている一方、C区においては盛土は認められず、As-BやAs-Aを含む腐植質土壌が形成されているように思われる。今後、さらに現地での土層観察を含めた調査分析を実施したい。

(早田)

### 補記

本調査は國學院大學栃木短期大学学長を主体者、調査団共同代表の小林・中村を担当者として、平成29年6月14日付で栃木県教育委員会教育長宛(栃木市教育委員会経由)で文化財保護法第92条に基づく発掘の届出を提出し、6月22日付で県教育長より実施許可の通知を得た。出土品については9月11日付で栃木警察署長へ埋蔵物発見届、県教育長宛に埋蔵文化財保管証を提出し、9月19日付で県教育長より文化財認定を受けた。また、平成29年度奈良大学研究助成「環状盛土造営社会から農耕社会への移行に関する研究」(研究代表者 小林青樹)、栃木県大学・地域連携プロジェクト支援事業「とちぎの古代遺産新発見Ⅱ」の一環として実施した。

なお、調査や整理作業に参加した大学院生と学生、そして、ご指導およびご協力をいただいた諸先生、諸氏、諸機関について、下記に芳名等を明記して謝意を表すことにしたい。

### 調査・整理・成果公開参加者 (学年は2018年3月当時)

**奈良大学:** 小林青樹(教授) 岩永祐貴(大学院修士2年) 萱原朋奈 新里遥(大学院修士1年) 郷原麻鈴 榊原夏菜 中島愛理(学部4年) 桐部夏帆 松岡奏(学部3年) 荒木清花(学部1年)

**國學院大學栃木短期大学:** 阿部直希 大島めぐみ 小屋野彩香 近藤あすか 齊藤聖 塩華瑛 富田圭祐(日本文化学科2年) 新井美咲 飯田千夏 石井俊祐 岩崎凧那 太田阿寿 小野梨奈 笠倉美歩 方波見睦美 小澤歩実 小菅拓朗 貞東真季 穴戸梢 萩原舞 橋本和奏(日本文化学科1年) 小倉眞由美 高橋享弥 星千尋 水川和(人間教育学科2年) 石川かおり 伊藤朱里 岡本一麦 中山奈美 永吉伽音 沼澤佑貴(人間教育学科1年) 安良岡伸之(科目等履修生) 酒寄雅志(教授・日本文化学科長) 後藤正人(教授・人間教育学科長) 早川富美子(教授) 坂本達彦(准教授) 中村耕作(准教授) 石坂昌圀(事務長) 岸美知子(助手) 柿沼里恵子(助手) 高垣美菜子(学芸員) 伏見和也 齊藤義人 中川優太 飛田彩哉子(本学卒業生)

**九州大学大学院:** 福永将大 **大手前大学:** 高橋侑希 **流山市教育委員会:** 小川勝和

### 協力者

中根地区 中根八幡神社 栃木市教育委員会 栃木県教育委員会 小山市教育委員会 FMくらら857

大島邦彦 坂本勝雄 熊倉教裕 石塚孝市 田村正昭 福富林 小島正明 谷内英樹 大出光一 栗田寿樹 尾島忠信 高見哲士  
小澤美和子 秋山隆雄 青木学 朝倉一貴 飯島尚起 石坂茂 岩崎数広 上野修一 岡山亮子 小栗信一郎 伊藤佑真 猪瀬亜  
沙美 江原英 江原美奈子 大島孝博 小曾根葉月 小松崎百恵 佐賀桃子 齊藤恒夫 設楽博己 柴田祐希 須藤和佳 曾我真  
実子 大工原豊 高村敏則 高橋悦子 武川夏樹 竹澤謙 蓼沼香未由 爲我井亮太 角田真也 手塚のぞみ 中島将太 野口静  
男 能登健 塚本師也 橋本澄朗 伴場聡 福富善明 丸笠望 宮内信雄 宮川博司 宮下茜 宮下昌史 宮田圭祐 宮田毅 宮  
田裕紀枝 村田章人 村山武 盛野浩一 山田仁和

#### 業務委託

特定非営利活動法人井草文化財研究所（石器実測） 火山灰考古学研究所（火山灰分析） 藤成測量株式会社（平面基準杭GPS測量）

#### 本概要報告執筆者

小林青樹・中村耕作・早田勉・高垣美菜子・岩永祐貴・萱原朋奈・新里遥・中島愛理・荒木清花

図版トレースはA区の遺構・遺物とB区遺物は岩永が担当し、B区遺構とC区遺構・遺物を萱原が担当した。

#### 参考文献

中根八幡遺跡学術発掘調査団 2016 「栃木県栃木市中根八幡遺跡第1次発掘調査概要報告」『文化財学報』第34集

中根八幡遺跡学術発掘調査団 2017 「栃木県栃木市中根八幡遺跡第2次発掘調査概要報告」『文化財学報』第35集

上記概要報告のほか下記において成果の一部を公表した

〔研究発表・講演・報告会〕

國學院大學栃木短期大学考古学研究会 2017.3 「中根八幡遺跡の発掘調査」國學院大學栃木短期大学平成27年度大学・地域連携プロジェクト支援事業報告会（國學院大學栃木学園教育センター）

小林青樹・中村耕作・岩永祐貴・萱原朋奈・新里遥 2017.4 「環状盛土遺構の形成と遺物出土状況－栃木市中根八幡遺跡第2次調査の成果－」考古学研究会第63回総会・研究集会（岡山大学）

中村耕作・小林青樹・福永将大・岩永祐貴・新里遥・萱原朋奈・木之内瞭 2017.5 「環状盛土遺構の形成過程と遺物の状態－栃木市中根八幡遺跡の研究2－」日本考古学協会第83回総会研究発表（大正大学）

中村耕作 2018.2 「縄文／弥生変革と中根八幡遺跡」平成29年度巡回展遺跡報告会（那珂川町なす風土記の丘資料館）

國學院大學栃木短期大学考古学研究会 2018.3 「中根八幡遺跡の発掘調査」國學院大學栃木短期大学平成28年度大学・地域連携プロジェクト支援事業報告会（國學院大學栃木学園教育センター）

〔展示〕

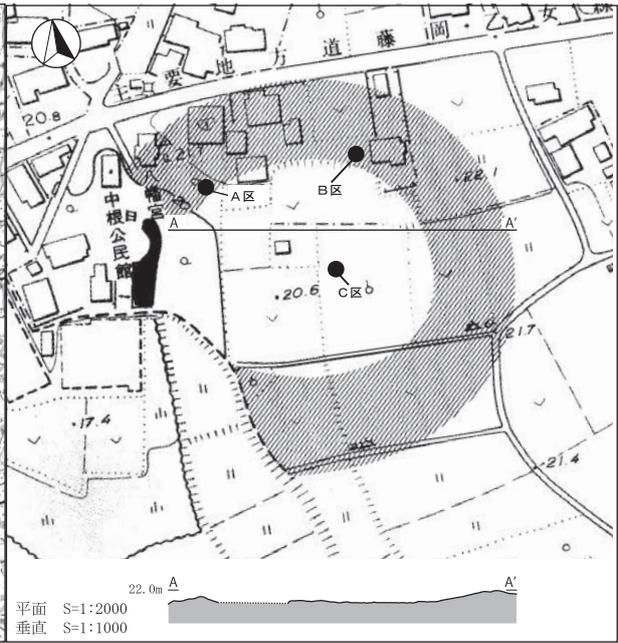
「奈良大学の考古力 奈良県斑鳩大塚古墳と栃木県中根八幡遺跡(縄文)の調査」奈良大学博物館 2017.7.3～9.1（同名のパンフレット発行）

「平成29年度巡回展 栃木の遺跡」栃木県立博物館 2017.7.22～9.3、那珂川町なす風土記の丘資料館 2018.2.10～4.1

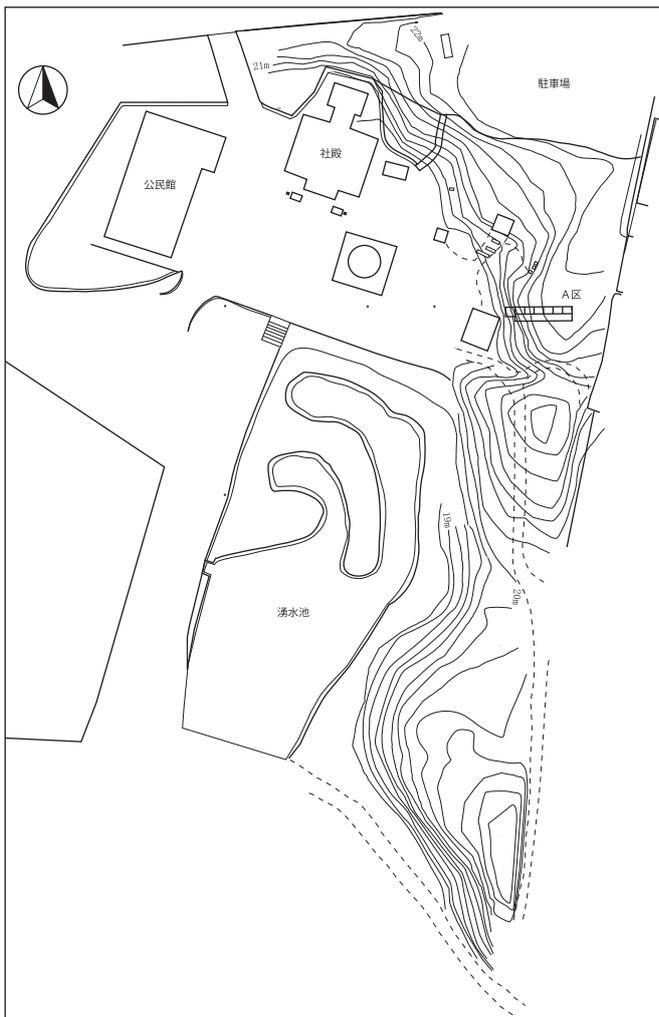
「平成29年度日本史系サークル合同展示」國學院大學栃木学園参考館 2017.11.11～



a. 中根八幡遺跡の位置



b. 中根八幡遺跡全体図（藤岡町史）と環状盛土断面図



c. 中根八幡神社境内とA区的位置 (S=1:800)



d. A区土層堆積状況

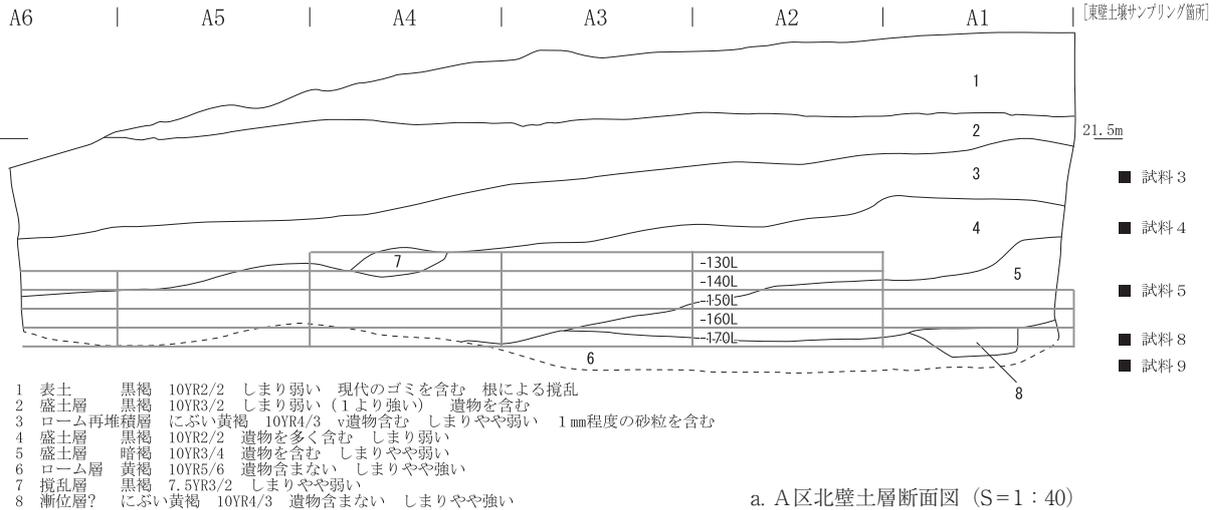


e. B区土層堆積状況

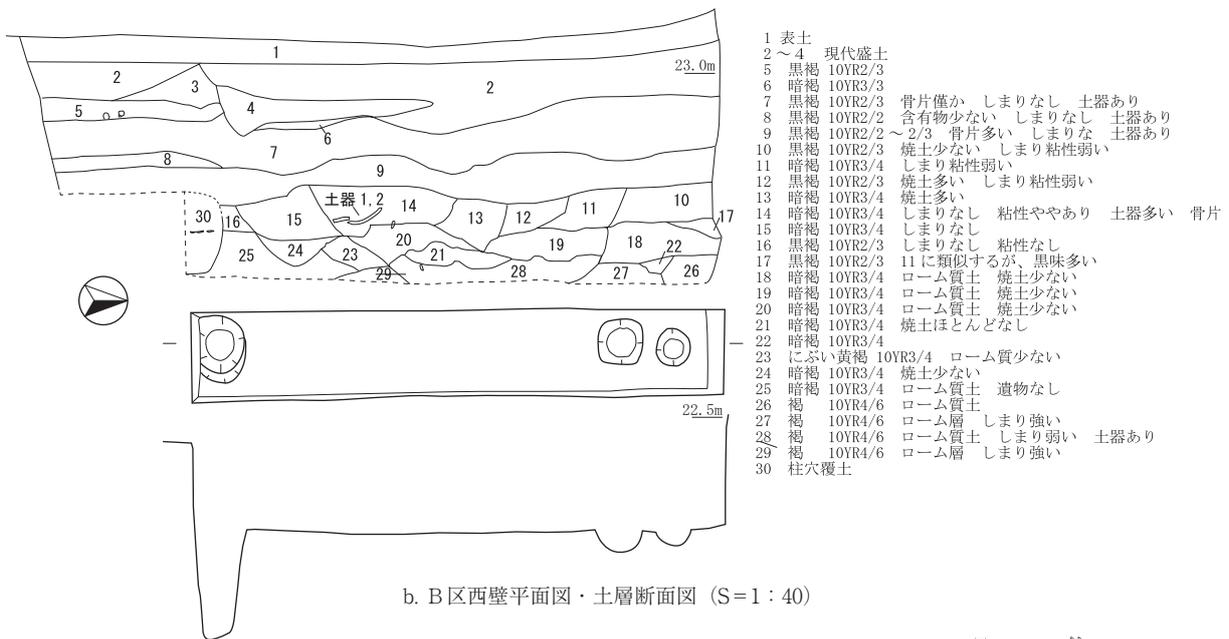


f. C区土層堆積状況

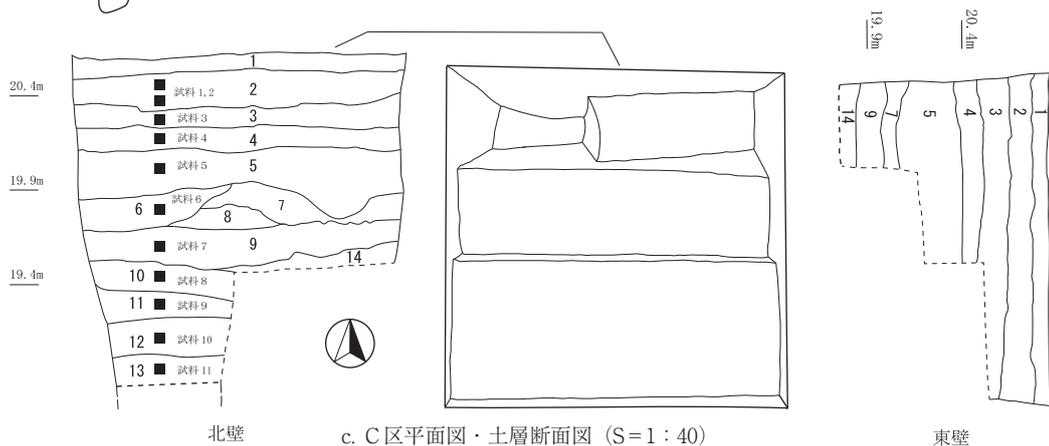
第1図 中根八幡遺跡の位置と調査区



a. A区北壁土層断面図 (S=1:40)



b. B区西壁平面図・土層断面図 (S=1:40)

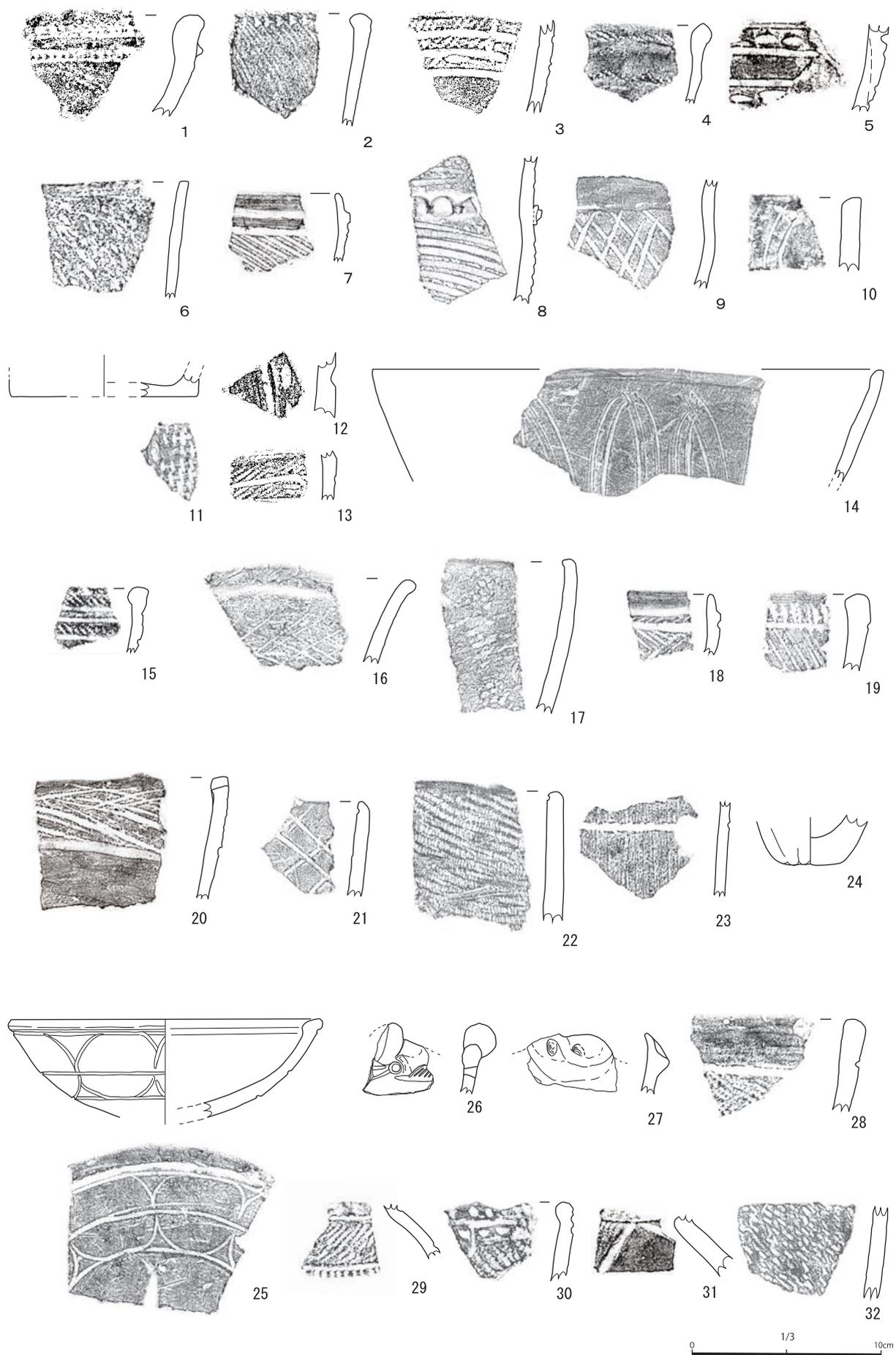


c. C区平面図・土層断面図 (S=1:40)

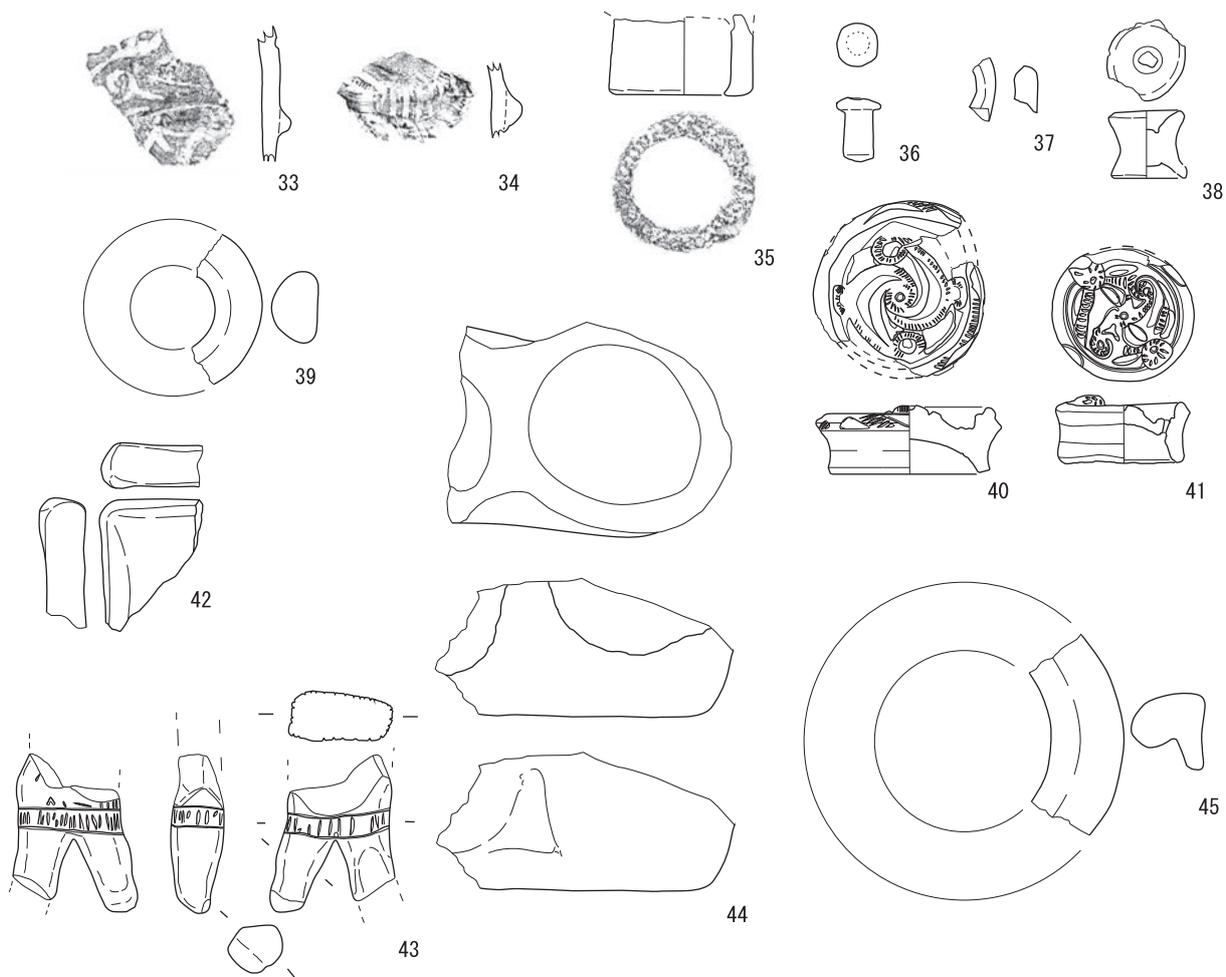
第2図 A~C区平面・土層断面図



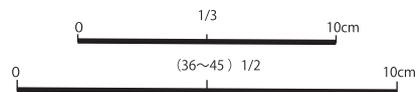
第3图 A1~A3出土遺物



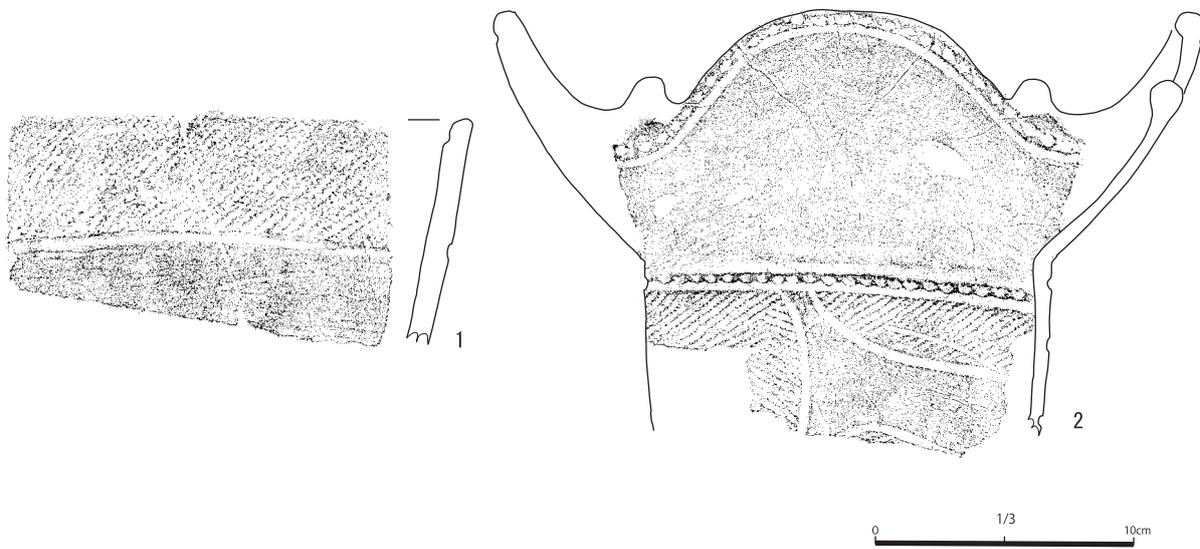
第4図 A4~A6出土遺物 (1)



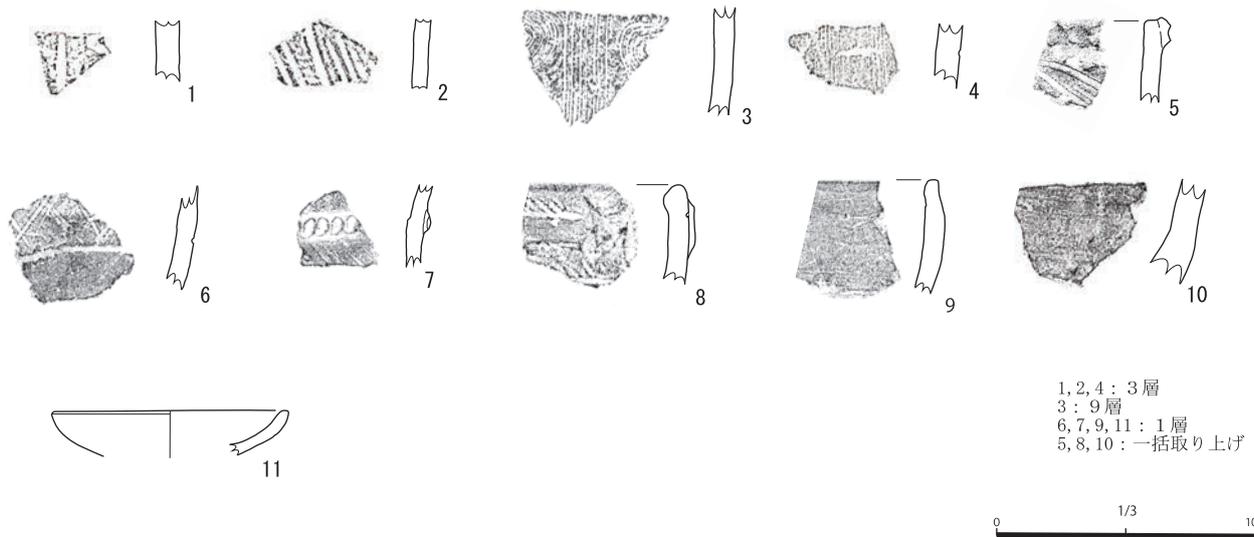
1-3:A4-130L 3-6:A4-140L 7, 11:A4-150L 8-10:A4-160L  
 12-14:A4-170L 15-19:A5-140L 20-29:A5-160L  
 30-32:A6-180L 33-34:A4b-70L 35:A7 36:A6b-30 ~ -40L  
 37:A4b-70L 38:A2 ~ A3, 39:A3-1層 40:A4b-70L  
 41:A5b-70L 42:A2-170L 43:A5-160L 44:A3b-70L 45:表採  
 (39・45は1次調査補遺)



第4図 A4~A6出土遺物(2)



第5図 B区出土遺物



第6図 C区出土遺物



写真1 C区調査の様子



写真2 A区調査の様子



写真3 発掘体験の様子



写真4 現地説明会の様子

1. テフラ検出分析結果

地点	試料	土層	軽石・スコリア			火山ガラス		重鉱物 (不透明鉱物以外)	
			量	色調	最大径	量	形態 色調		
A区東側	3	3層				(*)	md	淡灰	opx, cpx, (am)
	4	4層				(*)	md	淡灰, 淡褐	opx, cpx
	5	5層							opx, cpx, (am)
	8	5層				*	md, bw	淡灰, 淡褐, 無色透明	opx, cpx, (am)
	9	6層							opx, cpx, (am)
C区北壁	1	2層				**	pm(sp, fb)	淡灰, 淡褐, 褐, 白, (灰)白	opx, cpx, (am)
	2	2層				**	pm(sp)	淡灰, 淡褐, 褐, 白, (灰)白	opx, cpx, (am)
	3	3層				*	pm(sp)	淡灰, 淡褐, 褐, 白	opx, cpx, (am)
	4	4層				*	pm(sp)	淡灰, 淡褐, 褐, 白	opx, cpx, (am)
	5	5層				**	pm(sp)	淡灰, 淡褐, 褐, 白	opx, cpx, (am)
	6	6層				**	pm(sp)	淡灰, 淡褐, 褐, 白	opx, cpx, (am)
	7	9層				*	pm(sp)	淡灰, 淡褐, 褐, 白	opx, cpx, (am)
	8	10層							opx, cpx, (am)
	9	11層							opx, cpx, (am)
	10	12層							opx
	11	13層							opx, cpx

\*\*\*\*:とくに多い, \*\*\*:多い, \*\*:中程度, \*:少ない, (\*):非常に少ない, bw:バブル型, md:中間型, pm:軽石型, sp:スポンジ状, fb:繊維束状, ol:カンラン石, opx:斜方輝石, cpx:単斜輝石, am:角閃石, bi:黒雲母, 重鉱物の()は, 量が少ないことを示す。

2. 火山ガラス比分析結果

地点	試料	土層	bw(cl)	bw(pb)	bw(br)	md	pm(sp)	pm(fb)	軽鉱物	重鉱物	その他	合計
A区東側	3	3層	1	0	0	10	2	1	87	111	38	250
	4	4層	1	0	0	18	4	3	104	82	38	250
	5	8層	1	0	0	17	1	9	106	80	36	250
	8	5層	3	0	0	7	4	4	90	85	57	250
	9	6層	1	0	0	9	0	3	72	50	115	250
C区北壁	10	12層	0	0	0	1	1	0	69	25	154	250
	11	13層	0	0	0	0	0	0	78	36	136	250

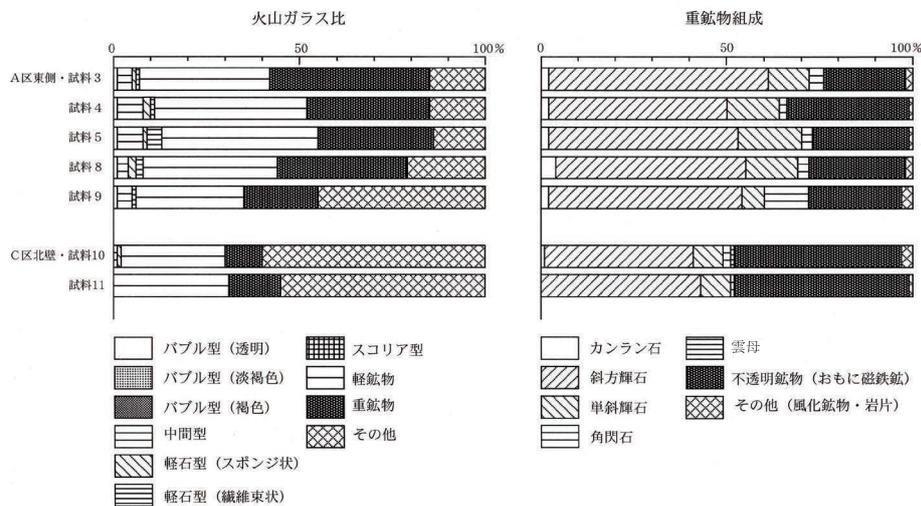
bw:バブル型, cl:無色透明, pb:淡褐色, br:褐色, md:中間型, pm:軽石型, sp:スポンジ状, fb:繊維束状, 数字は粒子数。

3. 重鉱物組成分析結果

地点	試料	土層	ol	opx	cpx	am	mc	opq	その他	合計
A区東側	3	3層	5	146	28	10	0	56	5	250
	4	4層	6	120	34	4	0	83	3	250
	5	8層	6	126	43	7	0	65	3	250
	8	5層	9	127	36	7	0	67	4	250
	9	6層	5	130	16	29	0	62	8	250
C区北壁	10	12層	2	101	18	5	1	115	8	250
	11	13層	0	108	21	3	0	115	3	250

ol:カンラン石, opx:斜方輝石, cpx:単斜輝石, am:角閃石, mc:雲母, opq:不透明鉱物, 数字は粒子数。

4. テフラ組成ダイアグラム



第7図 火山灰分析結果